

## 近現代内モンゴルにおける民族形成の二重構造

——アルホルチン旗バヤンボラク・ガチャアの事例研究——

ホルジギン・フレンサイン

はじめに

現在の中国内モンゴル自治区のモンゴル人社会における民族構成を考える場合、その起源を清朝初期頃の部族移動にさかのぼる必要がある。一六世紀末から一七世紀の初頭にかけて、著しく細分化されていた内モンゴル地域の各部は相次いで満洲人に投降し、清朝はこれらのモンゴル部に牧地を指定して、旗に編成した。その後現代に至るまでの数百年間にわたって、モンゴル人居住地における地域社会はおおむねこれをベースに形成されてきたといえよう。しかし、現在の内モンゴル各旗における民族構成は清朝初期の旗設立当初の状況に比べれば大きく変化し、複数の民族

によって構成された多民族社会となっている。本稿が検討の対象とする内モンゴル中部のアルホルチン (Aru-Qorčin / 阿魯科爾沁) 旗の場合は、清朝の天聰初年にアルホルチン部がフルンボイルから現在の地——内モンゴル自治区赤峰市<sup>(1)</sup>——に移住させられた後、アルホルチン部の王公と清朝皇室との婚姻関係によって一部の満洲人と思われる人々が当旗に移住し、一九世紀の後半頃になると今度は少なからず漢人農民が移住するようになった。特に清末の新政の実施にともなって行われた開墾では、南部の牧地の一部に開魯県が設置され、旗内でも「天山設治局」<sup>(2)</sup>の設置にともなう多くの漢人農民が入植した。また清末頃になると牧地開墾によって内モンゴル東部各旗のモンゴル人は相次いで破産し、それまで旗内社会に縛られていた彼らは比較的

開墾が進んでおらず牧草地に余裕のあった北部各旗に移住するようになった。こうした状況にもなつてモンゴル旗内社会の人口構成には「外旗モンゴル人」という人々が新たに加わるようになった。このような移住ブームを背景に、清末以後になるとモンゴル各旗内の地域社会の再編が加速され、それまでとことなる複数の民族集団による複合的地域社会が形成されていった。そこで本稿では、一九三九（康德二〇）年に満洲国興安局が中心となつて行つた非開放蒙地実態調査資料『興安西省阿魯科爾沁旗実態調査報告書』（以下『ハラトクチン調査報告書』と略称する<sup>(3)</sup>）の調査対象地であつたアルホルチン旗北部のハラトクチン村、つまり現在のバヤンウンドル・ソム（Bayanüdüür sumu）のバヤンボラク・ガチャー（Bayanbulay yačay-a）における民族構成の分析を通して、原住モンゴル人旗民の定着と漢人の入植という地域社会再編の主役を演じた二つの重要な側面の個々の仕組みや相互作用のメカニズムを解明したい。

『ハラトクチン調査報告書』を利用した先行研究として<sup>(4)</sup>はつい最近出された吉田順一氏の研究が挙げられる。氏の研究は興安嶺麓地域のモンゴル人が従来から営んできた経済の構造を、ハラトクチン村を事例に分析した。地域社会や民族構造に着眼する本稿とは視点がことなるものの、満洲国興安局の実態調査資料を内モンゴルの現実の社会にお

けるフィールド調査と結合させながら進めた研究としてその意義は大きい。

### 一 対象地域における追跡調査と関連資料

興安嶺山脈の東南麓地域で形成された農耕モンゴル人村落社会の構造を研究してきた筆者はこれまで満洲国興安局の非開放蒙地実態調査資料をもとに対象地域において追跡調査を行い、その一部に関してはすでに研究成果を公表している<sup>(5)</sup>。アルホルチン旗における実態調査もその一環として数年前から進めてきた。旧ハラトクチン村を中心にアルホルチン旗で行ってきた調査は次の通りである。

一回目の調査は一九九九年九月に行つた。今回はまずアルホルチン旗の郷土史研究家ホドルンガー氏の著作からすでに村名が変わってしまったハラトクチン村を現在のバヤンウンドル・ソムのバヤンボラク・ガチャーと特定し、同氏と共に同村において一週間にあたる調査を実施した。調査ではまず『ハラトクチン調査報告書』に記録されている一九三九年当初における二〇戸の牧民の存在や調査後の彼らの行方を確認した。その結果、この二〇戸の人々のうち子孫がなお村内に居住しているのは約半数を超えており、現在も村社会の骨格をなしていることがわかつた。第一回

目の調査ではこれ以外にも現在の村民一二八戸の人的ネットワークや生業についても確認した。第一回目の調査ではまた『ハラトクチン調査報告書』で言及されているホント・バルガス（坤都鎮）のホヅル村やボムテンタラ村に関するもある程度確認することができた。

二回目の調査は二〇〇一年八月の末から九月の上旬にかけて行った。今回の調査では地域を取り巻く状況を把握することに重点をおいた。特に興安嶺を挟んで北部に隣接する西ウジュムチン旗との牧草地紛争に象徴される諸関係や国営林場との関係を調査した。今回はまた牧草地の分配など牧畜の事情及び村民構造についてもさらなる調査を行った。

三回目（二〇〇二年七月）と四回目（二〇〇三年一〇月）の調査は吉田順一氏と共同で行った。筆者は前二回の調査の不足点を補い、あらたに同村における漢族の移住に関して詳細に調査をした。

興安局の非開放蒙地実態調査のなかでもアルホルチン旗における調査は、当時満洲国興安局に勤務していて、後に内モンゴル自治区政府の副主席となったハフンガー（Qafu-rya）<sup>(6)</sup>氏が調査班の責任者をつとめ、非開放蒙地実態調査全般に関する技術面での第一人者ともいえる竹村茂昭氏が加わっていたもともと充実したチームによる調査だった。

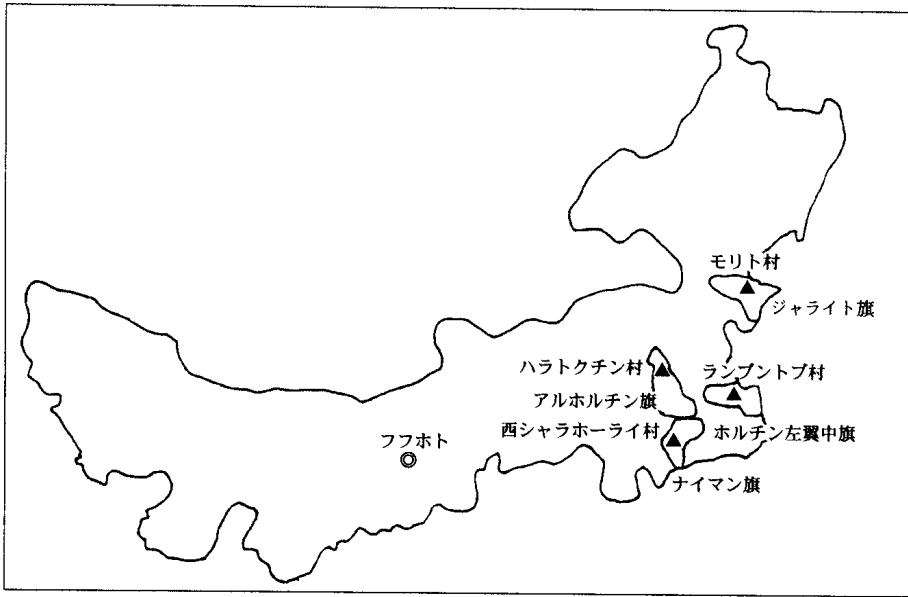
調査班はハラトクチン村に自前のゲルを建て一〇日間滞在した。彼らの調査は村民の生活実態から労働関係、生産関係にまで多岐にわたって行われ、調査データは『ハラトクチン調査報告書』に「統計編」として個別にまとめられている。なお『ハラトクチン調査報告書』の本文はアルホルチン旗全体の歴史に一通り言及しており、特に当旗における土地の権利関係や開墾について詳細に記録しているところが注目に値する。『ハラトクチン調査報告書』以外に、アルホルチン旗に関する同時代文献には、一九三九年の実態調査に参加した竹村茂昭氏や村岡重夫氏が個別に発表したものがあるが、内容は『ハラトクチン調査報告書』の記述と大きくことなるところはない。<sup>(7)</sup> 本稿では、戦前の資料の記述とそれに対する追跡調査の結果を照らし合わせる際に、戦後の資料として文史資料のような一九八〇年代以後に同旗で書かれた地方史関連資料や地名志、旗志など近年発行された資料もなるべく参照した。

「地図2」で示した通り、旧ハラトクチン村はアルホルチン旗の最北端に位置し、その牧草地は興安嶺を超えて西ウジュムチン旗にまでつらなっている。二〇世紀後半のいくたびかの再編を経て村名は現在バヤンボラク・ガチャールとなっている。「附表」で確認できるように、住民は既に一二八戸（二〇〇三年の調査）、五五〇人に達し、一九三

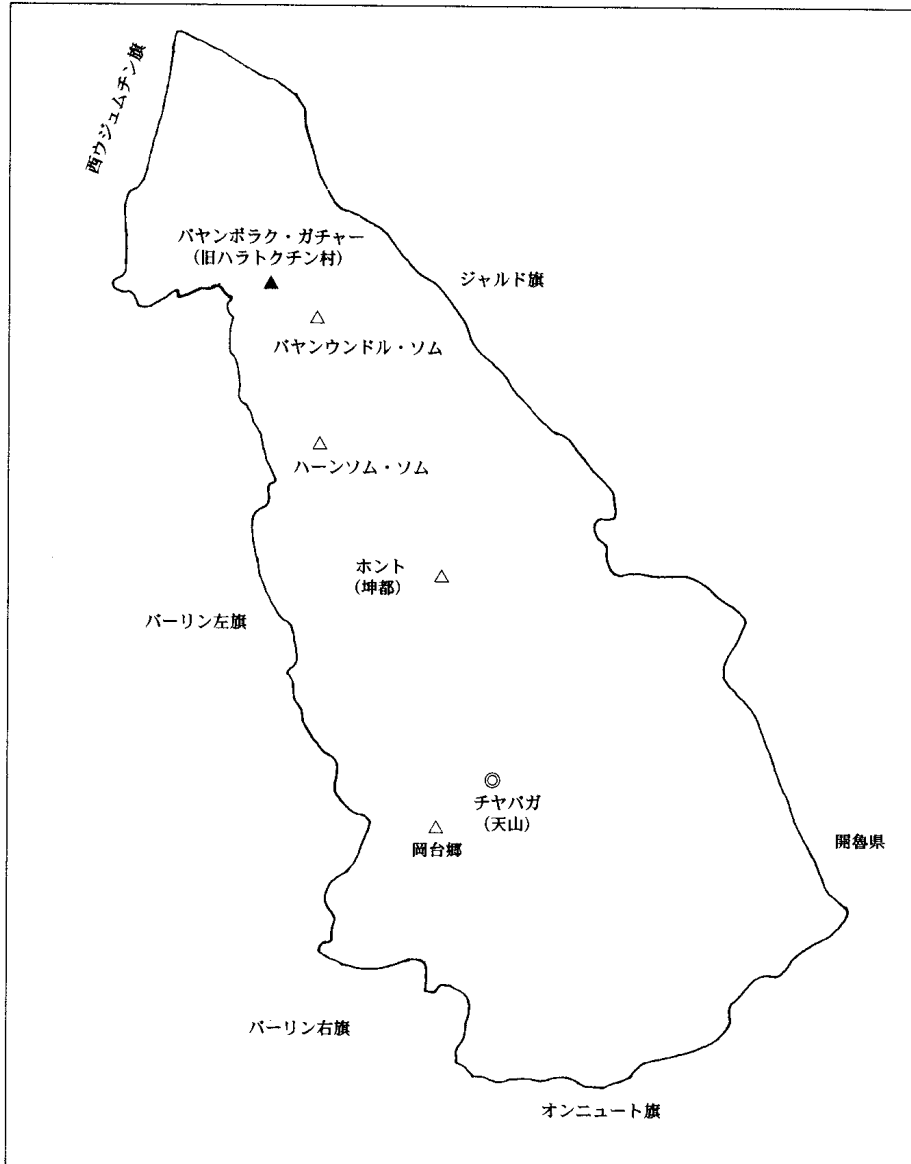
九年当時より六倍以上に膨らみ、バヤンウンドル・ソムの中でも規模の大きいガチャーの一つとなっている。

「表1」は『ハラトクチン調査報告書』『統計編』の記述を追跡調査で確認し、その前後の状況を付け加えたものである。そのうち原資料のカタカナ表記とモンゴル語の発

音を精密に対照したほか、例えばNo.6の Nanjijab の姓はアルトチンではなくアスドだったことなども明確になった。また一九三九年調査当時記録された二〇戸の牧民以外にもNo.21とNo.22の漢人二人が居住しており、この二人の漢人はその後村にとどまって、ハラトクチンにおける最初の漢



「地図1」 内モンゴル自治区におけるアルホルチン旗及び満州国興安局非開放蒙地実態調査四部落の位置



「地図2」 アルホルチン旗内図

「表 1」 1939年当時のハラトクチン村の各戸の基本情況

| No. | 姓/Obuy            | 旧カタカナ表記名 | モンゴル語名       | 旧身分     | 現在の村内世帯数 | その他                             |
|-----|-------------------|----------|--------------|---------|----------|---------------------------------|
| 1   | ボルヂクト(Borjigin)   | ゴンチユクジャブ | Гончугjab    | 四等タイジ   | 6戸       | 1947年の土地改革で殺された。                |
| 2   | ボルヂクト(Borjigin)   | マンタガル    | Mantayar     | タイジ     | 養子が隣村にいる | 1945年以前に死去した。                   |
| 3   | アルトチン(Altačin)    | ノルブ      | Norbu        | 箭丁      | 7戸       | 1944年に死去。筆者はその子の Bulteger 家に宿泊。 |
| 4   | ボルヂクト(Borjigin)   | チーシーパ    | Čišiba       | 四等タイジ   | なし       | 47年の土地改革で殺された。                  |
| 5   | タタル(Tatar)        | パンタグル    | Pantayar     | 箭丁      | 5戸       | 1959年に死去。                       |
| 6   | アルトチン(実はAsud)     | ナムジルジヤップ | Namjiljab    | 箭丁      | 本村に子孫なし  | 1976年に死去。                       |
| 7   | バイシント(Bayisingtu) | ドルヂ      | Dorji        | 箭丁      | 養子が3戸あり  | 1945年以前に死去。                     |
| 8   | タタル(Tatar)        | ボルホ      | Bögerkü      | 箭丁      | 1戸       | 1948年頃に死去。                      |
| 9   | タタル(Tatar)        | ナムジルジヤムス | Namjijamsu   | 箭丁      | 孫の代で断絶した | 1945年頃に死去。                      |
| 10  | アサット(Asud)        | トムルジヤナ   | Temürjan-a   | No.4の随丁 | 6戸       | 1968年に死去。                       |
| 11  | ボルヂクト(Borjigin)   | グリクノルブ   | Gelegnorbu   | タイジ     | 子孫は隣村にいる | 1960年に死去。                       |
| 12  | ボルノト(Bornud)      | ウルトナスト   | Urtunasutu   | 箭丁      | 3戸       | 1977年に死去。                       |
| 13  | タタル(Tatar)        | ゲンデンジヤムス | Gendenjamsu  | 箭丁      | 隣村に子孫あり  | 1941年に死去?                       |
| 14  | ダールハタ(Darqad)     | イドムジヤブ   | Yidamjab     | 箭丁      | 10戸      | 1953年に死去。                       |
| 15  | ホルト(Jogdai)?      | イエシイ     | Yesi         | 箭丁      | 4戸?      | 1967年に死去。                       |
| 16  | ホブナル(Köbünar)?    | ボロク      | Bulay        | 箭丁      | 隣村に子孫がいる | 1945年より以前に死去。                   |
| 17  | アサタ(Asud)         | アルバンタブン  | Arbantabun   | 箭丁      | 2戸       | 1982年頃死去。                       |
| 18  | ボルヂクト(Borjigin)   | ガラサン     | Γalsang      | タイジ     | なし       | 1945年以前に死去。                     |
| 19  | ボルヂクト(Borjigin)   | トムルトゴ    | Temürtoyuy-a | タイジ     | 隣村に子孫がいる | 1956年に転出し、1968年に死去。             |
| 20  | サジガサラ?            | ヂクムト     | Jigmed       | 廟丁      | なし       | 革命に参加し、息子の Batujaryal は当ソムの書記。  |
| *21 | 周                 |          |              |         | 3戸       | 1939年に既に村にいた。                   |
| *22 | 邢                 |          |              |         | 2戸       | 同上                              |

人移民となったのである<sup>(8)</sup>。自分の姓に対する伝承が持つ意義に関しては後節で言及するが、筆者が持参した『ハラトクチン調査報告書』の記述によって何人もの人々の自分の姓に対する伝承の混乱を訂正することができた。そして文献に記録されている主人公たちのほとんどが調査後まもなく訪れた社会主義革命の嵐によって命を落としたこともわかった。また『ハラトクチン調査報告書』に記された二〇戸のうち一〇戸（うち養子一戸）、No.21とNo.22の二戸の漢人を入れると二二戸のうち一二戸の人々の子孫が村に住しており、その総戸数は五二戸に達し、村の総戸数二二八戸の半分近くを占めている。漢人邢や周両姓の子孫五戸を除いても一九三九年当時の原住モンゴル人の子孫が現在も村社会の骨格なしていることがわかる。

## 二 モンゴル諸氏族の定住と再編

下記の「表2」をもとに現在のバヤンボラク・ガチャーにおける各氏族の状況を分析してみたい。現在のバヤンボラク・ガチャーには氏族不明のKiry-e（庫倫）旗やQaracın（喀喇沁）旗出身者四戸と氏族不明の三戸、そして周、劉までの七姓の漢人二七戸を除けば一四姓九二戸のモンゴル人が生活しており、漢人も含めると当村には全部で二三の

姓をもつ人々が暮らしている<sup>(9)</sup>。

内モンゴルに限らず多くのモンゴル人コミュニティでBojigin（ボルジギン）が最大の氏族をなしている状況は周知の通りである。ここバヤンボラク・ガチャーではBojigin氏族はその血縁関係によって（A）（B）（C）の三つにグループに分類されている。（A）グループのBojiginの六戸は『ハラトクチン調査報告書』の農家「No.1」の直系子孫で、天聡四年にアルホルチン部の第一陣が今の地に辿り着いた時か、或いは四年後の天聡八年に第二陣が到着した時にこの地に来た人々で、バヤンボラク・ガチャーのもっとも古い住民の一部といえよう。（B）グループのBojigin一五戸は『ハラトクチン調査報告書』が書かれる一九三九年当時ハラトクチン部落の周辺で遊牧していたタイジ出身の人々で、その直後にハラトクチンの人々と行動を共にし、徐々にこの村落形成の中心的な氏族の一つと化していった。また（B）グループは（A）グループと同様に天聡初年に移住してきた原住民の子孫で、両グループの先祖は共にもとアルホルチン部の支配層を担っていた人々であったことが推測される。（A）グループと（B）グループと違って、（C）グループのBojiginは一九四〇年代に南部のハラチン（Qaracın）旗からこの地域に移住してきた人々で、南部のジョスト盟地域から北上した多くのモン

「表2」 バヤンボラク・ガチャー（旧ハラトクチン村）の各氏族の分類

| 氏族名称                   | 村落内の戸数 | 入村年代          | 氏族の由来、その他   |
|------------------------|--------|---------------|---|
| Borjigin(A)            | 6戸     | 1939年以前、村内    | 1939当時は村一の富裕戸であった農家No.1のGončo-gjabの一族である。フルンボイルから南下する時から旗ジャサクに近い関係のタイジで、最も古い氏族。                     |
| Borjigin(B)            | 15戸    | 1939年以前、附近    | 1939年以前には周辺地域で遊牧してしたが、その後に入村した。アルホルチン部の原住民と推測され、旧身分はタイジにあたる。  |
| Borjigin(C)            | 2戸     | 1939年以後、旗外    | ハラチン旗から移住してきたボルジギン氏族。タイジではない。   |
| Tatar(A)               | 9戸     | 1939年以前、村内    | 清代初期からアルホルチン部の一部として遊牧していた。  |
| Tatar(B)               | 2戸     | 1939年以後、隣村    | 1974年に南部ダルハン・ガチャーより移住してきた。アルホルチン部民として村内原住民のTatarとは同一のルーツだと考えられる。                                    |
| Toryud<br>(ulayan mal) | 12戸    | 1939年以後、Qontu | 1939～1945年の間にウジュムチン旗から移住してきた。移住民のなかで唯一興安嶺の西側から南下してきた氏族である。  |
| Darqad                 | 10戸    | 1939年以前、村内    | No.14の子孫で、アルホルチン部の原住民であったと考えられる。  |
| Dolud                  | 6戸     | 1939年以後、旗内    | 1959年の人民公社設立の際に南部のサイハンタラー・ソムより移住してきた。アルホルチン部の原住民?   |
| Altačin                | 7戸     | 1939年以前、村内    | No.3の子孫。Borjigin氏に次ぐアルホルチン部の中心氏族の一つである。   |
| Asud                   | 6戸     | 1939年以前、村内    | No.10の子孫。アルホルチン部の原住民の一つ。  |
| Ĵogdai                 | 4戸     | 1939年以前、村内    | No.15の子孫。アルホルチン部の原住民?   |
| Borbičin               | 4戸     | 1939年以後、近隣    | 1939年頃に近隣地域で遊牧していた。アルホルチン部の原住民である。  |
| Dörbed                 | 2戸     | 1939年以後、隣村    | 1956年にKeremガチャーより移住してきた。  |
| Šayaĵayai              | 2戸     | 1939年以後、隣村    | 1978年にDarqanガチャーより婿入りしてきた。部族の来歴不明。  |
| Bornud<br>(čangmao)    | 3戸     | 1939年以前、村内    | No.12の子孫。アルホルチン部の原住民。19世紀中頃に捻軍を鎮圧したセンゲリンチンのホルチン・モンゴル軍に参加したことで、Čangmao(長毛?)と呼ばれているうちに元々の氏族名を忘れたとのこと。 |
| Ĵoyačul                | 1戸     | 1939年以後、隣村    | Darqanガチャーより婿入りしてきた。  |
| Kereyid                | 1戸     | 1939年以後、隣村    | 1966年にKeremガチャーより富裕牧民として追放されてきた。アルホルチン部の古い氏族の一つであるKereyid氏の出身。                                      |
| 不明<br>(Küriy-e旗)       | 3戸     | 1939年以前、隣村    | 1930年代の早い時期に同旗に移住してきて、近隣を転々としていた可能性が高い。   |
| 不明<br>(Qaračin人)       | 1戸     | 1939年以後       | 1990年に旗南部のバヤンフワ・ソムより入り婿としてきたが原籍はハラチン旗とのこと。  |
| 不明                     | 3戸     | 1939年以後       | 1959年に南部のKeremガチャーより移住してきた。   |
| 周                      | 3戸     | 1939年以前       | 調査当時部落に滞在していた。  |
| 邢                      | 2戸     | 1939年以前       | 調査当時部落に滞在していた。  |
| 李                      | 10戸    | 1939年以後       | 1967年に南部の岡台郷からきた被災漢民。   |
| 陳                      | 4戸     | 1939年以後       | 同上  |
| 袁                      | 5戸     | 1939年以後       | 同上  |
| 呂                      | 1戸     | 1939年以後       | 同上  |
| 劉                      | 2戸     | 1939年以後       | 同上  |

ゴル人の一員としてアルホルチンの地にきた人々であろう。<sup>(10)</sup> また清朝時代にジョスト盟の中心を担うハラチン部やトメド部は他のモンゴル部と違って *Borjigin* 氏族が旗の支配者として君臨してきたのではなく、ウリヤンハイ (*Uriyangqai*) 部がタブナンとして支配してきたことからこの (C) グループの *Borjigin* はタイジではなかったことが容易に分かる。このように、ハラチンを原籍とする (C) グループの *Borjigin* を除いてもバヤンボラク・ガチャーにおいてはもとアルホルチン部の中心をなしていた *Borjigin* 氏族の (A) グループと (B) グループを合わせると (二二戸) ボルジギン氏族が村全戸数 (二二八戸) の約一七%近くを占め、村における第一氏族の地位を確固たるものとしている。戸数では *Borjigin* 氏族に次ぐ第二の地位を占める氏族は *Toryud* である。 *Toryud* はウジユムチンを移住元とする人々であるが、一九四〇年以後におけるバヤンボラク・ガチャーへの移住者のほとんどが南部各地からくる中で唯一 *Toryud* が興安嶺を超えた西北部のウジユムチン旗から移住してきた人々である。彼らは一九三九年から一九四五年までの間の戦乱、特にこの時期に興安嶺の山岳地帯を拠点に跳梁していた馬賊の騒乱を避けて南下してきたと言われ、一時期はホント地域まで南下していたという。また村では *Toryud* の人々を通常 *Ulayan mal* (紅い牛)<sup>(11)</sup> という別名で呼んでい

近現代内モンゴルにおける民族形成の二重構造

るが、それはこの *Toryud* の人々にまつわるある笑い話に由来すると言われている。<sup>(12)</sup> 後述する *Bornud* の場合と同様、ある氏族にまつわる何らかの印象深い出来事がある人々の氏族名に変わっていく現象がよく見受けられるが、それも近現代以後におけるモンゴル諸氏族再編の一つの特徴といえよう。こうした意味では *Bornud* も同様である。同村における *Bornud* の人々は筆者が最初に調査した際、自分の氏族名を *Bornud* と知らず「*Changnao*」と自称していたが、彼らは『ハラトクチン調査報告書』の農家 No.12 の子孫であることが判明した。「*Changnao*」とは漢語の「長毛」(*Changnao*) のモンゴル語読みで、一八六〇年代に祖先がセンゲリンチンのホルチン軍に加わって捻軍叛乱を鎮圧して戻ってきたことにより、それ以後彼らをそう呼ぶようになったという。

*Toryud* とほぼ同様な地位を占めるのは *Tatar* 氏族 (一一戸) である。チンギス・ハーン時代のこの古い氏族を名乗る人々が何故この地域に暮らすようになったのか、それを立証する先行研究は又見あたらない。大多数を占める (A) グループの *Tatar* は早期にアルホルチン部の一員としてきた人々で、(B) グループの *Tatar* の二戸も一九七〇年代に南部の村から移住してきたとはいえ (A) グループの人々と同じルーツを持つのである。



上記三氏族以外、一九三九年の段階で当村、或いはその周辺地域で遊牧していた氏族にはDargad (一〇戸)´ Alaciin (七戸)´ Asud (六戸)´ Jögdai (四戸)´ Borbicin (四戸)´ Bornud (三戸) などがあり、彼らはともに清朝初期に旗制が発足した頃のアルホルチン部の構成員だったことが考えられる<sup>(13)</sup>。Qaraciin 旗<sup>(14)</sup>や一九三九年以後に南部から移住してきた前掲 Borjigin (C) の二戸と Tatar (B) の二戸、そして Torjud の一二戸を除いても、バヤンボラク・ガチャーにおいてはアルホルチン部の古い住民と考えられる人々が六四戸に達しており、全住戸の半数を占めている。

前掲の Tatar も含めて上記の Dargad´ Alaciin´ Asud´ Jögdai´ Borbicin や Bornud などの氏族はアルホルチン旗内のほかの地域や旗周辺地域でもその存在を確認することができる<sup>(15)</sup>。しかし、一三〜一四世紀のモンゴル帝国時代や一七世紀初頭頃のモンゴル史にもよく登場するこれらの氏族に関しては、彼らが現在の地に存在することとなった歴史的経緯については必ずしも明確にすることはできない。清朝初期のモンゴル諸氏族の移住や民国そして二〇世紀後半における社会的混乱によって、外旗のモンゴル人もアルホルチン旗に多く移住してくるようになった。天聰八年にアルホルチン旗が設立された当初、果たしていくつの氏族が旗内に暮らしていたのかは文字史料による確認はできないが、バヤ

ンボラク・ガチャーの Borjigin の人々の間では、一五四六年にハプト・ハサルの第一五代の子孫フンデレン・ダイチンが部民を率いて今の地にくる際に Borjigin´ Dargad´ Bökener´ Sayajayai´ Jöyacu´ Omar´ Tatar´ Borbicin´ Jöydai らの九つのソムがあったが、後にアル・トサラクチが一つのソムを連れてきて合流し、合わせて一〇のソムとなったと言われている。この言い伝えには古い氏族の一つであるはずの Asud の名前が見あたらないが、Borjigin や Asud 両氏族の間にも今も伝わっている話によると<sup>(16)</sup>、Asud は Borjigin のアルバト(属民)だったようである。そのまま信頼するわけにも行かないが、少なくとも清朝初期の旗制が始まった当初、アルホルチン旗におけるモンゴル人氏族は十数程度に止まっていたことが推測される。しかし、二〇世紀の中頃になるとモンゴル人氏族は三四に増加し、更に二〇世紀の終わり頃になると、旗内の約一〇万人のモンゴル人に依然使用されているモンゴル語の氏族は八五に上ったほか、九八の漢語の姓を名乗るモンゴル人も現れた<sup>(17)</sup>。上記の Torjud や Bornud のように、モンゴル語の氏族に関しては古い氏族名以外に、先祖にまつわる伝承や職業、居住地などの名前がそのまま氏族名になっていく現象も多く、加えて農耕化により漢人の影響を受けた一部のモンゴル人が漢語の姓を名乗ったり、一九八〇年代初期に一部の漢人が民族をモ

ンゴル族に改めたことなどにより、モンゴル人社会における氏族問題を更に複雑化した。

### 三 漢人の移住

現在バヤンボラク・ガチャーに居住する漢人をその移住履歴から概ね二つのグループに分類することができよう。一つは現住漢人の八割を占める一九六〇年代に移住してきた人々で、もう一つはそれ以前にきた人々である。また彼らの移住元から見ると一九六〇年代以前にきた漢人は山西地域を移住元とするが、それ以後に移住してきた人々は共通して山東地域をルーツとする。以下この二つのグループに関して個別に検討していきたい。

#### 1 山西出身の漢人

『ハラトクチン調査報告書』からはハラトクチン村の正式な住民としての漢人の存在は確認できないものの、各住戸の位置を示した村落地図には漢人が居住するゲルが一つ記されている。ところが、報告書はこの漢人の存在に関して一切触れられておらず、ハラトクチン村は二〇戸のモンゴル人によって構成されていると表現されている。しかし、この漢人が居住するとされるゲルには当時周と邢という姓

の二人の山西出身の漢人が住んでいて、彼らの子孫が現在もバヤンボラク・ガチャーに居住していることが追跡調査で明らかになかった。一九三九年当時、周氏と邢氏の二人は満洲国側が発行した通行書を持ってモンゴル人居住地域で行商をしていた山西出身の独身漢人七人のうちの二人で、その後ほかの仲間が旗中心地である天山鎮に居住したのとは対照的に、彼らは村に残った。周は旗内他所のモンゴル人女性と結婚し、邢は漢人と結婚した。現在村内の周の子孫は三戸（附表の「No.54」「No.55」「No.81」）一五人、邢の子孫は二戸（附表「No.56」「No.118」）八人である。後述する一九六〇年代以後に移住してきた漢人に比べれば、彼らはモンゴル人との通婚を頻繁に結び、地域社会に融合している度合いが高い。例えば「附表」の「No.54」の場合は通常 *Sayinçoytu* というモンゴル語の名前で村民に呼ばれており、家業の中心は牧畜に置かれている。

清朝時代以後、内モンゴル地域へ移住した漢人は、ドロノール（多倫）より西部地域の場合は山西、陝西地域出身者が多いのに比して、それより東部、つまり興安嶺の東南麓地域の場合は山東や河北地域出身者がほとんどである。「地図1」で分かるように、アルホルチン旗はちょうど内モンゴルの中部に位置するが、地域的には興安嶺の麓地域に属するので山東出身の漢人が圧倒的に多い。また山東、

河北出身の漢人の多くが小作農民としてモンゴル人居住地域で定住するのと対照的に、山西や陝西地域出身の漢人の多くは行商を行う者が多く、清朝時代に内モンゴル及びハルハ・モンゴル各地の物流や金融を独占していたフフホトを本社とする大手「旅蒙商」<sup>(18)</sup>の「大盛魁」<sup>(19)</sup>ももともとは山西出身者の経営していたものである。しかし、山西出身者が興安嶺を超えてその東南麓地域まで行商をしていたとする記録は少なく、そうした意味ではハラトクチン村の例は興味深い。一九六〇年代以後に移住してきた山東出身の漢人たちによると、山西人の話す言葉は硬く、習得したモンゴル語の発音も山東人が習得したモンゴル語の発音といくらかことなるという。

## 2 山東出身の漢人

「表2」で示した通り、バヤンボラク・ガチャーには前述した周や邢両氏族以外に李、陳、袁、呂、劉の合わせて五つの姓がある。彼らは一九六七年三月に当旗南部の漢人農耕地域である岡台<sup>(20)</sup>という郷から移住してきた人たちである。一九六七年というちょうど中国で文化大革命が始まった翌年であり、この時期に漢人が計画的にモンゴル人居住地域へ移住させられたのはいうまでもなく当時の政治状況と密接に関係する。文化大革命が始まった一九六六年の年

末にアルホルチン旗が属するジョウオド盟(Juu uda ayimay)<sup>(21)</sup>は内モンゴル自治区から分離されて遼寧省に編入された。これを受けアルホルチン旗では全旗の幹部会議(中国では通常「四級幹部会議」と称す)を開き、農業を中心とする思想を打ち出し、特に牧畜地域に対しても食料を自給できるようにするという方針が打ち立てられた。ところが、バヤンウンドルのような牧畜を中心とするモンゴル人居住地域では、収穫量の高い漢人型の農業を行う経験がまだ浸透していなかったため<sup>(22)</sup>、バヤンウンドル・ネゲデル(人民公社)の幹部が南部地域から数戸の農民を北部に移住させて農業の指導に当たらせるよう旗当局に申請し、それに応える形でやってきたのがバヤンボラク・ガチャーにおける漢人たちである。以下便宜上彼らを「農業指導移民」と略称する。いわば彼らは一八世紀以後、禁を犯して蒙地に入植してきた多くの漢人と違って、少なくとも形式上は牧畜地域のモンゴル人に招かれてきた人たちであるということができよう。当時たった二五戸できて二つの村に分散居住した彼らの「農業指導移民」は、現在六十数戸にまで増え、バヤンボラク・ガチャーだけでも約二〇〇〇畝(ム)近くの農地を開拓し、この純牧畜地域に当たるソムに漢人型の農業を広めた<sup>(23)</sup>。

一九六七年に「農業指導移民」を率いてきた責任者の呂

洪儒氏（七〇歳）はバヤンボラク・ガチャーに分配され、現在も当村に居住している。彼は旗南部にある岡台郷の東岡村から一三戸の仲間の農民を連れ、隣の新鋒郷から一緒に移住することになった一二戸の農民と合わせて二五戸の人々のリーダー役として任命されてきた。呂氏が自分の村から率いてきた一三戸は全員バヤンボラク・ガチャーに分配されたが、先鋒郷からきた一二戸は隣のハイルスタイ村に分配された。当時バヤンウンドル・ネグデルは四台の馬車を派遣し、彼らを招いてきた。彼らは村役場から一戸当たり一つのモンゴル・ゲルを与えられ、慣れない生活をはじめたわけだが、南部に戻った二戸以外の人々は全員残って現在に至っている。

周知の通り、一九六〇年代後半は中国とソ連が激しく対立していた時代である。バヤンボラク・ガチャーはモンゴル国の国境から僅か数百キロしか離れておらず、しかも村が位置する谷間はちょうど一九四五年に対日宣戦布告によってソ連赤軍が南下してきた主要なルートの一つであり、老人の話によると終戦当時ソ連赤軍の行列が数日間も続いたという。また対ソ防衛に備えてバヤンボラク・ガチャーのとなりにあるハラタクチン山の山頂には洞窟が掘られ、ソ連軍の侵入を想定して、それを迎撃するための物々しい設備が備えられていた。移住に当たって、呂氏らの「農業指

導移民」が最も心配したのは国境に近づくことによるリスクだったという。彼らが不慣れたモンゴル人コミュニティで数々の文化的衝突を起こしながら根を下ろしていく過程は内モンゴルにおける漢人の定住を考えるうえで興味深い事例の一つだが、それは別稿に譲り、本稿では呂氏を事例として、彼ら山東出身の漢人の移住ルートを簡単に整理しておきたい。

呂氏一族はもともと山東省萊陽県の出身だとされる。<sup>(24)</sup>山東を後にしたのは呂洪儒氏より一〇世代前のことだとされるが、概算すると今から少なくとも二五〇年以上は経っており、<sup>(25)</sup>清朝の雍正時代にさかのぼる。雍正時代には山東や直隸地域から大量の被災民が「封禁政策」<sup>(26)</sup>が取られていた外藩モンゴルの一部であるジョスト盟やジョオド盟に押し寄せたことを受け、彼ら移民を送還するのではなく現地に安置するようにと「借地養民」政策が取られたことは周知の通りである。推測の域を脱しないが、モンゴルの地を指した呂氏の移住史をこのような歴史的枠組みで考えられなくもない。呂氏の先祖が最初に辿り着いたのはジョウオト盟のオンニユド左翼旗のウダン（烏丹）附近である。<sup>(27)</sup>そこでかなり長い年月暮らしたが、一九三一年頃に生活苦から呂洪儒の父が一家を連れてウダンよりさらに北部に位置するアルホルチン旗のチャバガ（天山鎮）附近に移住して

きた。<sup>(28)</sup> 呂氏にとしての二回目の移住である。つまり二〇世紀の三〇年代頃になると、第一回目の移住先であるジョオド盟中部地域が彼ら移住民にとっても生活し難くなるまで疲弊し、更に新天地を求めなければならなくなったことを意味するのである。山東や河北など中国本土から内モンゴルを目指してくる移住民のほとんどがよりよい生活環境を求めて絶え間なく南部から北部に向かって移住していくケースは近隣地域でも確認されている。<sup>(29)</sup> 一九三一年という激動の時期ということもあって、呂氏は二回目の移住先では結局五年しか滞在せず、再び近くの岡台に移住した。彼らはこの地で土地改革を迎え、はじめて農地を与えられた。社会主義革命は、山東を後にしてから二五〇年以上もの間小作農や傍青をやってきた呂氏にはじめて自分に属する農地を与えた。しかも移住先であるモンゴル人の地においてである。呂洪儒氏は土地改革以後一貫して村の幹部を務め、バヤンウンドルの地に移住したのも「幹部が率先して上級の指示に従う」という理由できたという。

以上、バヤンボラク・ガチャーに移住するまでの呂氏の移住経路を一通り整理したが、呂氏一族にとってバヤンボラク・ガチャーは第四回目の移住先である。周知のように、興安嶺山脈は内モンゴル東部地域のなかでも農業が成り立つ地域の北限として位置づけられている。呂氏は二世紀以

上の期間において四回もの移住を経てこの北限の地に到達したのである。

おわりに

現在の内モンゴル自治区東部、地理的にいえば興安嶺山脈の東南麓における地域社会の再編は、清朝の初期頃から一八世紀の末頃までの清朝政府による部族移動に始まり、清朝—中華民国—満洲国—中華人民共和国という長い歴史のプロセスを経て徐々に行われて来た。農耕モンゴル人村落社会は漢人型の農耕社会の単純な模倣ではなく、漢人型農耕社会とモンゴル遊牧社会との間の衝突と妥協の産物だとする結論を筆者は別の事例研究に基づいて示唆したが、<sup>(31)</sup> しかしそれを証明するには地域社会形成の事例分析を多く積み重ねなければならぬ。本稿はそうした農耕モンゴル人村落社会形成の歴史的ダイナミズムを描く一連の事例分析の一環として位置づけることができよう。

「地図1」で示した興安四省実態調査地域のうち、本稿で取り上げたハラトクチン村は、満洲国領内のモンゴル人居住地域における「牧主農従」、つまり牧畜が中心で農業が副業的な役割を果している地域のサンプルとして調査されている。つまりハラトクチン村は調査報告書が今日に伝

えられている四つの調査村落のなかでも、遊牧的特徴がもつとも濃厚に残されていた地域であった。<sup>(32)</sup> 従って、ハラトクチン村のその後の歴史を調査分析することは、興安嶺麓地域が伝統的遊牧社会からいかに定住化社会へと移行していったかという農耕化の初期段階の状況を理解するうえで重要である。

本稿ではアルホルチン部の中核を担う諸氏族と外旗から移住してきたモンゴル人諸氏族との違いを整理し、地域社会形成の過程において彼らが互いに融合と再編を繰り返していたことをある程度示すことができたと考える。

内モンゴル地域に向かう漢人移住民は、その長い移住の過程において、原住の遊牧民と対立しながら定住の地を求め、そのほとんどが排除と対立の繰り返しの中で定住にこぎつけたといえよう。しかし、そうした歓迎されざる存在でありながらも、時には国家権力に守られながら、強力に移住を推し進めたのであった。雍正時代の「借地養民」政策は別として、本格的な官主導の移民プロジェクトであった清末の新政の際には、移住民たちは優遇策のもとで、通常より低い価格と地税で農地を入手し、移住先での最大の障碍であるモンゴル人からの抵抗は、当局が武力で押さえつけていた。この種の政府の保護を受けた移住は中華民国期まで続いたとみなされがちであるが、二〇世紀の後半に

において社会主義イデオロギーのもとそれまで以上に押し進められたことが本稿で提示された。これ以外に本稿では、モンゴル社会で氏族/Obuy がいかに新たに発生し、定着していくのかという現象に関してもある程度示し得たと思われる。

## 註

- (1) 赤峰市は一九八三年に旧ジョウオド盟 (Jiū u da ayimay) を改めたものである。
- (2) 開魯県は一九〇八年にアルホルチン旗と東・西ジャルド三旗南部のシャラムレン (西拉木淪) 河沿岸地域の肥沃な牧草地の開墾に伴って設置された県で、「天山設治局」はその開墾がさらに旗内に及んだ結果、一九二六年に設置された開墾を管理する機関である。
- (3) 満洲国政府は領内のモンゴル人居住地域を、開墾されていた県が置かれ、その管轄権が東北三省の何れかにわたっていたモンゴル旗地を「開放蒙地」、その他正式に開墾されておらずモンゴル人が多く居住している旗地を「非開放蒙地」と二つに分類して、それぞれに対して詳細な調査を実施した。「開放蒙地」の実態調査に関しては広川佐保 (二〇〇〇) で取り上げられており、「非開放蒙地」の実態調査に関しては吉田順一 (一九九七) で紹介されている。本稿で取り上げられる『ハラトクチン調査報告書』は康徳六年に行った「非開放蒙地」実態調査の一つで、調査報告

書と統計編がきちんと出されて今日までに残されている四つの文献の一つである。

- (4) 吉田順一(二〇〇四)。
- (5) ボルジギン・ブレンサイン(二〇〇三)は、ジリム盟ホルチン左翼中旗のランブントブ(郎布套布)村に対する分析を行った。非開放蒙地実態調査が実施され、その「統計編」が残っている同じジリム盟に属するナイマン(奈曼)旗(一九四八年以前はジョーオド盟に属してきた)の西シヤラホーライ(沙力好来)村でも二回にわたって追跡調査(二〇〇〇年、二〇〇二年)を行っており、その成果も順次整理公開していきたい。
- (6) 東部内モンゴル自治運動の指導者であり、内モンゴルで大きな政治的影響力を持っていたハフンガー氏がこの村に来ていたことは調査内容とは全く別の形で伝説として今もこの地域に伝わっている。
- (7) 例えば竹村茂昭著「阿魯科爾沁旗に於ける土地に関する諸慣行及び権利関係」『蒙古研究』第二巻第一輯(一九四〇年)と村岡重夫著「阿魯科爾沁旗に於けるハラタケ慣行」『蒙古研究』第二巻第二輯(一九四〇年)などがある。
- (8) 『ハラトクチン調査報告書』の「統計編」などで具体的に言及されていないものの、附属図「ハラトクチン農家(包)配置図」にはこの二人の漢人が居住するゲルが記されている。
- (9) 本編では、日本語の文脈によって姓や氏族を使い分けているが、いずれもモンゴル語の *Obuy* という意味を表すものである。
- (10) 一八九一(光緒一七)年の「金丹道暴動」以後、ジョスト盟地域から多くのモンゴル人が北部の興安嶺麓地域に避難移住したことに關しては拙著「The Complex Structure of Ethnic Conflict in the Frontier: Through the Debates around the 'Jindandao Incident' in 1891」, *INNER ASIA*, Vol.6-No1 (pp41-60), (二〇〇四)を参照されたい。
- (11) ホルチン方言では *Mal* とは家畜の総称であると同時に牛を指す場合が多い。
- (12) *Toryud* のある祖先が、牛よりも樽を貴重に思い、樽に頭をつっこんだ紅い牛の首を切り落としたという。以後人々は彼らの氏族名まで *Ulayan mal* と呼ぶようになったという。またこれに近い言い伝えは近隣のバーリン左右両旗のモンゴル人の間にも伝わっている。
- (13) このうち *Altačin* に関してはホルチン部左翼七つのオトグ (*Ouy*) の一つだと確認することができ、*Altan Kürdün Mingyan Kegesütü Bičig* によると、ハサルの配下にある左翼七つのオトグとは *Sine mingyan tabun*, *Muu mingyan*, *Urad*, *Tatayaljin*, *Botaciin*, *Altačin*, *Forlus* で、右翼六つのオトグには *Keryid*, *Joid*, *Yike mingyan*, *Kegün kesig*, *Doyibakun*, *Sagaid* などがあるとされる。
- (14) 清朝時代、ハラチン三旗(右翼、中、左翼)はジョスト盟に属していたが、ハラチン右翼旗の一部は内モンゴル自治区赤峰市のハラチン旗として残り、ハラチン中旗の一部

は寧城県となっている。なお、ハラチン左翼旗の一部は現在ハラチン左翼モンゴル族自治県（喀拉沁左翼蒙古族自治県）として遼寧省に属している。この地域から北部へ移住したモンゴル人に関しては通常彼らの移住元をまとめてハラチン旗といふことが多い。

(15) “*Arū qorčïn qosiyun-u oyilaly-a”-yi nayirayulqu Jöblei 1995* や “*Bayarin barayun qosiyun-u oyilaly-a”-yi nayirayulqu Jöblei 1993* を参照。

(16) 北元末清初における *Asud* 部の状況に関しては最近出された烏雲畢力格 (二〇〇四) によって明らかにされている。それによると、一七世紀初頭に現在の内モンゴル自治区のソニト旗辺りで遊牧していた *Asud* 人は一六二八年にリクダン・ハーンによって打ち負かされた後、まずはもともと同じトメンに属していたハラチン部に合流し、少なくとも一六三一年以前にハラチン部とともに満洲人のアイシン国に投降し、八旗に編入されたという。この騒動の中で一部の *Asud* 人はチャハル部に編入された可能性もあり、さらにはハラチン部に合流していく途中アバガーと呼ばれる人々に略奪されたが、この頃のアバガー部を広い意味でとらえるとそこに四子部落 (*Dörben Keiked*)、アルホルチンやオンニユード (*Ongniyud*) 部も含まれているということである。このことから考えると、アルホルチン部の支配者である *Borjigin* に *Asud* というアルバトがあったことも容易に解釈できよう。満洲八旗に編入された *Asud* 人の子孫の一部が現在も遼寧省瀋陽市の郊外にコミュニティを形成し

近現代内モンゴルにおける民族形成の二重構造

て暮らしていることは二〇〇四年に筆者によって確認されている。

(17) “*Arū qorčïn qosiyun-u oyilaly-a”-yi nayirayulqu Jöblei 1995*。

(18) 清朝時代にモンゴル各地を旅して行商をしていた漢人商人を通常「旅蒙商」と呼ぶことが多い。

(19) 中国人民政治協商会議内蒙古自治区委員会文史資料委員会 (一九九〇) 『旅蒙商大盛魁』、内蒙古人民出版社、(内蒙古文史資料第十二集) を参照。

(20) 内モンゴルでは、モンゴル人居住地域における旗や県以下の地方行政単位を *Sumu* (Sumu) や *Balgas* (*Balyasu*) というのに対して漢人居住地域の場合は中国本土と同様に郷や鎮と呼ばれている。

(21) この時内モンゴル自治区東部のフルンボイル盟 (*Külün-boiyir ayimay*) は黒龍江省、ジリム盟 (*Jirim ayimay*) は吉林省にそれぞれ編入され、一九七六年に再び内モンゴルに戻された。

(22) モンゴル人が遊牧の片手間に行ってきた農業であるナムク・タリヤー (漫散子農業) に関しては吉田順一 (二〇〇四) で取り上げられている外、筆者が一九九六年の日本モンゴル学会春期大会 (一九九六年五月一八日、於早稲田大学) で「牧畜地帯におけるモンゴル人の農業——二〇世紀前半期の内モンゴル東部地域の状況」をテーマとして研究発表を行った。

(23) これらの「農業指導移民」を招聘した当時のバンウンドル・ネグデルの責任者は現在も人々に非難されることがある。



- (24) 萊陽県とは山東半島の真ん中に位置する内陸の県だが、現在は萊陽市となっている。
- (25) 中国では通常一世代を二五年で計算する習わしがある。
- (26) 入関後、清朝は外藩モンゴルへの漢人の移住を長期にわたって禁止する政策をとった。それは光緒二八(一九〇二)年の新政までつづいたが、それにも拘わらず多くの漢人が内モンゴルへ移住することに成功し、清朝にその事実を黙認させた。
- (27) 現在の赤峰市紅山区哈拉道口鎮の外脖子井村である。
- (28) 現在の天山鎮平和村に当たる。
- (29) ボルジギン・ブレンサイン(二〇〇三)を参照。
- (30) 撈青とは清末から東部内モンゴル地域を含む東北地域で広く見られるようになった農業賃金労働者の階層を指し、内モンゴル地域に限定すると蒙地開墾や農地化にともなって生じた現象と考えられる。詳細はボルジギン・ブレンサイン(二〇〇三)(八〇〜八一頁)を参照。
- (31) ボルジギン・ブレンサイン(二〇〇三)。
- (32) 興安四省非開放蒙地実態調査のうち調査報告書がきちんと出されて今日にまで伝えられているのは本稿で取り上げられている『興安西省阿魯科爾沁旗実態調査報告書』以外、『興安南省科爾沁左翼中旗実態調査報告書』、『興安南省札萊特旗実態調査報告書』などであり、ナイマン旗の西シャラホーライ村に関してはその「統計編」のみが今日に伝えられている。

参考文献

- “Arū qorčīn qosiryūn-u öyilaly-a”-yin nayirayulqu Jöblel 1995 “Arū qorčīn qosiryūn-u oyilaly-a”; Öbür mongyul-un arad-un keblel-ün qoriya
- 烏雲畢力格 二〇〇三 「阿蘇特的結局」、『明清档案与蒙古史研究』第三輯
- 興安局 一九二九 『興安西省阿魯科爾沁旗実態調査報告書』
- 中国人民政治協商會議阿魯科爾沁旗旗委文史資料編輯委員會編 一九八九 『阿魯科爾沁旗文史』(第三輯)
- 広川佐保 二〇〇〇 「モンゴル人の「満洲国」参加と地域社会の変容——興安省の創設と土地制度改革を中心に」、『アジア研究』第四一巻第七号
- “Bayarin Barayun Qosiryūn-u oyilaly-a”-yin nayirayulqu Jöblel 1993, “Bayarin barayun qosiryūn-u oyilaly-a”, Öbür mongyul-un arad-un keblel-ün qoriya
- ボルジギン・ブレンサイン 二〇〇三 『近現代モンゴル農耕村落社会の形成』風間書房
- 吉田順一 二〇〇四 「興安嶺南山地の経済構造——ハラトクチンの経済の分析を手掛かりに」、『北東アジア研究』第七号、島根県立大学北東アジア地域研究センター
- 吉田順一 一九九七 「興安四省実態調査について——非開放蒙地の調査を中心に」、『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第四三輯

附表 バヤンボラク・ガチャー（旧ハラトクチン村）住民各戸の略歴

| No. | 姓/obuy                 | 名 前            | 人口 | 移住歴、その他   |
|-----|------------------------|----------------|----|---|
| 1   | Dolud                  | Qurčabayatur   | 4  | 1956年の合作化の際、現在のサイハンタラ・ソムより来住した。   |
| 2   | Toryud<br>(ulayan mal) | Nasunmōngke    | 4  | 1945年以前にウジュムチンより来住。村内のToryud 氏族は全員この一族に発し、村内唯一のウジュムチン出身者である。姓に関する伝承は注を参照。 |
| 3   | Borjigin               | Da・Bōke        | 1  | 1939年当時先祖が部落近辺で遊牧していたが、その後入村した。   |
| 4   | Darqad                 | Bümbür-e       | 7  | No.14の子孫。   |
| 5   | Darqad                 | Altanbayan-a   | 4  | 同上  |
| 6   | Borjigin               | Bayančayan     | 3  | 土地改革以前に Qontu 地区より移住してきた。   |
| 7   | Altačin                | Siyuu・Tegüs    | 5  | No. 3 の子孫。  |
| 8   | Borjigin               | Laam-a         | 6  | No. 1 の子孫。  |
| 9   | Darqad                 | Rasidansan     | 3  | No.14の子孫。元村書記。  |
| 10  | Altačin                | Nasunčoytu     | 4  | No. 3 の子孫。  |
| 11  | Altačin                | Bayatur        | 4  | 同上  |
| 12  | Tatar                  | Soyultu        | 4  | No. 9 の子孫。  |
| 13  | Tatar                  | Öljeibatu      | 4  | No. 5 の子孫。(取材協力者Šebeljab老人の息子)  |
| 14  | Tatar                  | Š・Gereltü      | 4  | 同上 (Šebeljab 老人の息子)   |
| 15  | Tatar                  | Batužiryal     | 4  | 同上 (Šebeljab 老人が同居)   |
| 16  | Žogdai                 | Γu・Qasčilayu   | 3  | No.15の子孫。   |
| 17  | Žogdai                 | Erdeničilayu   | 4  | 同上  |
| 18  | Žogdai                 | Da・Tegüs       | 3  | 同上  |
| 19  | Tatar                  | Erdenibayar    | 3  | 1974年に南部にある Darqan ガチャー辺りより移住してきた。  |
| 20  | Tatar                  | Baljinim-a     | 3  | 同上。上記と同族。   |
| 21  | Tatar                  | Kešig          | 4  | No. 5 の子孫。  |
| 22  | Borbičin               | Rasižamsu      | 6  | 先祖が1939年当時は当部落に属してはいなかったものの近辺で遊牧していた。その後当部落に属すようになった。                     |
| 23  | Borbičin               | Balji          | 4  | 上記と同族。  |
| 24  | Borbičin               | Sečen          | 5  | 上記と同族。  |
| 25  | Tatar                  | Qurčabatu      | 4  | No. 5 の子孫。  |
| 26  | Asud                   | Γarudi         | 6  | No.10の子孫。現ガチャー書記。毎回調査に協力してくれた人物。  |
| 27  | Darqad                 | Kesigdügüireng | 3  | No.14の子孫。   |
| 28  | Dörbed                 | Batu           | 3  | 1956年に南部の Kerem ガチャーより移住してきた。   |
| 29  | Toryud<br>(ulayan mal) | Bayar-a        | 4  | [No. 2 ]と同族。  |
| 30  | Toryud<br>(ulayan mal) | Tümenbayar     | 4  | [No. 2 ]と同族。  |
| 31  | Toryud<br>(ulayan mal) | Sangbu         | 4  | [No. 2 ]と同族。  |
| 32  | Dolud                  | Damba          | 6  | [No. 1 ]と同族。  |
| 33  | Šayajiyai              | Buyan          | 4  | 1976年に南部の Darqan ガチャーより入り婿として来た。  |

|    |                        |                         |   |   |
|----|------------------------|-------------------------|---|---|
| 34 | Borjigin (taiji)       | Donurob                 | 4 | 1939年当時は近隣で遊牧していた。No.1とは別の Tayiji。  |
| 35 | Borjigin (taiji)       | Batudalai               | 4 | 上記と同族。  |
| 36 | Dolud                  | Šogdurjab               | 2 | 1958年に入り婿として来た。   |
| 37 | Asud                   | Narančoytu              | 4 | No.17の子孫。   |
| 38 | Asud                   | Möngkebayar             | 5 | No.17の子孫。   |
| 39 | 不明                     | Rasisedeng              | 5 | 1959年に南部の Kerem ガチャーより婿入りしてきた。  |
| 40 | Altačin                | N・Moqur-a               | 4 | No.3の子孫。  |
| 41 | 李                      | 李軍<br>(漢)               | 3 | 1967年に南部の岡台郷から集団移住してきた。移住名目は「農業指導移民」である。以下村内の李姓は同様。                                 |
| 42 | Borjigin               | Böke                    | 5 | 1939年当時は近隣地域で遊牧していた。  |
| 43 | Bornud(čangmao)        | Š・Moqur-a               | 3 | No.12の子孫。   |
| 44 | Bornud(čangmao)        | Undurqu                 | 1 | No.12の子孫。   |
| 45 | Borjigin               | Demčügdongrub           | 3 | [No.3]と同族。  |
| 46 | 不明                     | Püngsügnorbu            | 4 | [No.39]と同族。   |
| 47 | Jojačul                | Siauu・Sereng            | 5 | 1981年に南部の Darqan から入り婿としてきた。  |
| 48 | Dolud                  | Dambarinčin             | 4 | [No.1]と同様。  |
| 49 | Dolud                  | Sečincoytu              | 4 | [No.1]と同様。  |
| 50 | Bornud(čangmao)        | Kamar                   | 5 | No.12の子孫。有力な取材協力者の一人。   |
| 51 | Altačin                | Somiy-a                 | 8 | No.3の子孫。4回の調査は当家で宿泊し Boltayar 老人は有力な取材対象であった。                                       |
| 52 | Toryud<br>(ulayan mal) | Odqunbayar              | 4 | [No.2]と同様。  |
| 53 | Tatar                  | Čimesereng              | 5 | No.8の子孫。  |
| 54 | 周                      | Sayinčoytu<br>(周栄寛) (漢) | 6 | 原籍は山西省太原。1939年当時先祖が既に来住していたが、興安局の調査には正式な住民として記録されなかった。                              |
| 55 | 周                      | 周仁濟 (漢)                 | 4 | [No.54]と同族。   |
| 56 | 邢                      | 邢志国 (漢)                 | 4 | 原籍は山西省太原。周姓と同様に1939年以前に来住していたが、興安局の調査に正式な住民として記録されなかった二人の独身漢人のうちの一人である。村で商店を経営している。 |
| 57 | 陳                      | 陳国棟 (漢)                 | 3 | 袁、李、劉、呂とともに1965年に南部の岡台郷から集団移住してきた。  |
| 58 | 袁                      | 袁洪義 (漢)                 | 6 | 1965年に南部の岡台郷から集団移住してきた。   |
| 59 | 陳                      | 陳法 (漢)                  | 2 | [No.57]と一族。   |
| 60 | 呂                      | 呂洪儒 (漢)                 | 2 | 1965年に南部の岡台郷から集団移住してきた。村で商店を経営。息子が旗の賓館で支配人をしており、村の出世頭の一人と言われている。                    |
| 61 | 陳                      | 陳国軍 (漢)                 | 4 | [No.57]と同族。   |
| 62 | 李                      | 李洪徳 (漢)                 | 2 | [No.41]と同族。   |
| 63 | 李                      | 李先東 (漢)                 | 3 | [No.41]と同族。   |
| 64 | 李                      | 李仗 (漢)                  | 5 | [No.41]と同族。   |
| 65 | 李                      | 李光 (漢)                  | 3 | [No.41]と同族。   |
| 66 | 陳                      | 陳国連 (漢)                 | 5 | [No.57]と同族。   |
| 67 | 李                      | 李芝 (漢)                  | 5 | [No.41]と同族。   |
| 68 | 李                      | 李富 (漢)                  | 4 | [No.41]と同族。   |
| 69 | 李                      | 李根 (漢)                  | 5 | [No.41]と同族。   |

|     |                        |              |   |   |
|-----|------------------------|--------------|---|---|
| 70  | 李                      | 李棍 (漢)       | 5 | [No.41]と同族。   |
| 71  | 劉                      | 劉衛 (漢)       | 5 | 1967年に南部の岡台郷から集団移住してきた。   |
| 72  | 劉                      | 劉倫 (漢)       | 1 | [No.71]と同族。   |
| 73  | 袁                      | 袁洪銀 (漢)      | 5 | [No.58]と同族。   |
| 74  | 袁                      | 袁洪瑞 (漢)      | 3 | [No.58]と同族。   |
| 75  | Borjigin               | Šagdar       | 6 | [No. 3 ]と同族。  |
| 76  | Borjigin               | Buyan-a      | 5 | [No.34]と同族。   |
| 77  | Kereyid                | Sayinnigbu   | 1 | 1966年に南部の Kerem ガチャーより富裕戸の子孫として追放されてきた。   |
| 78  | Borjigin               | Qasbatu      | 3 | [No. 3 ]と同族。  |
| 79  | Dörbed                 | Gebei        | 6 | 1979年に Qontu 地域より入り婿としてきた。  |
| 80  | Borjigin               | Sengge       | 6 | [No. 3 ]と同族。  |
| 81  | 周                      | 周任富 (漢)      | 5 | [No.54]と同族。   |
| 82  | Borjigin               | Γaya         | 4 | No. 1 の子孫。  |
| 83  | Borjigin               | Cingbatu     | 5 | No. 1 の子孫。  |
| 84  | Borjigin               | Tümenjiryal  | 5 | No. 1 の子孫。  |
| 85  | Borjigin               | Urtunasutu   | 4 | No. 1 の子孫。  |
| 86  | Borjigin               | Nominvačir   | 7 | [No. 3 ]と同族。  |
| 87  | Toryud<br>(ulayan mal) | Radn-a       | 4 | [No. 2 ]と同族。  |
| 88  | Asud                   | Geberabji    | 4 | No.10の子孫。書記の実弟。   |
| 89  | Borjigin               | Bayanjirüke  | 5 | 1939-1945の間にQontuより移住した。母Γarbuは土地改革時代の老幹部で、数少ない活躍した女性である。                               |
| 90  | Darqad                 | Qasbayan-a   | 5 | No.14の子孫。   |
| 91  | Darqad                 | Püngsügnorbu | 5 | No.14の子孫。   |
| 92  | Borjigin(qaračın)      | Rasirabdan   | 4 | 1955年にBayanbulayソムより養子としてきた。  |
| 93  | Borjigin(qaračın)      | Ĵigmed       | 7 | [No.92]と同族。   |
| 94  | Borjigin               | Nimadongrub  | 4 | [No. 3 ]と同族。  |
| 95  | Borjigin               | Γonuy-a      | 4 | [No. 3 ]と同族。  |
| 96  | Borjigin               | Erdenimöngke | 5 | [No.42]と同族。   |
| 97  | Borjigin               | Nasunurtu    | 9 | [No. 3 ]と同族。  |
| 98  | 不明(küriy-e)            | Tegsibayar   | 4 | 原籍は Küriy-e 旗だが1939年より以前に当地域に移住し近隣で遊牧していた。1940年頃に入村した模様。移住途中に Γadameyirin の蜂起軍に出会ったという。 |
| 99  | Toryud<br>(ulayan mal) | Ü・Moqur-a    | 5 | [No. 2 ]と同族。  |
| 100 | 不明(küriy-e)            | Öljei        | 3 | [No.98]と同族。   |
| 101 | 不明(küriy-e)            | Serengvačir  | 4 | [No.98]と同族。   |
| 102 | Toryud<br>(ulayan mal) | Buyanjiryal  | 3 | [No. 2 ]と同族。  |
| 103 | Asud                   | Qaserdeni    | 4 | No.10の子孫。書記の実弟。   |
| 104 | Tatar                  | Ĵoriytu      | 3 | No. 9 の子孫。  |
| 105 | Darqad                 | Namsarai     | 4 | No.14の子孫。   |
| 106 | Darqad                 | Sevre-e      | 8 | No.14の子孫。   |
| 107 | Darqad                 | Qasčilayu    | 4 | No.14の子孫。   |
| 108 | Toryud<br>(ulayan mal) | Uyunbatu     | 4 | [No. 2 ]と同族。  |

|     |           |              |   |   |
|-----|-----------|--------------|---|---|
| 109 | Borbičin  | Genden       | 5 | [No.22]と同族だが Genden 本人は1975年に Qansüm-e ソムより養子入りした。                    |
| 110 | Šayaǰayai | Vangbu       | 8 | [No.33]と同族。   |
| 111 | Qarčín ?  | Ĵilinbayar   | 4 | 1990年に Bayanquva ソムより入り婿としてきた。  |
| 112 | Darqad    | Buyandelger  | 4 | No.14の子孫。   |
| 113 | 不明        | Kesigbuyan   | 3 | 1992年に Bayanbulay ソムより入り婿としてきた。                                       |
| 114 | Ĵogdai    | Sirub        | 3 | No.15の子孫。   |
| 116 | Borĵigin  | Cingĵoriytu  | 7 | No. 4 の子孫。  |
| 117 | Altacin   | Ningbü       | 4 | No. 3 の子孫。  |
| 118 | 邢         | 邢志民          | 4 | [No.56] と同族。  |
| 119 | 袁         | 袁洪臣          | 4 | [No.58]と同族。   |
| 120 | 袁         | 袁洪成          | 1 | [No.58]と同族。   |
| 121 | Dolud     | Nolm-a       | 5 | [No. 1 ]と同族。  |
| 122 | Toryud    | Kesigtoytaqu | 1 | [No. 2 ]と同族。  |
| 123 | Toryud    | Kečiyeltü    | 3 | [No. 2 ]と同族。  |
| 124 | Toryud    | Ölĵeibayar   | 3 | [No. 2 ]と同族。  |
| 125 | 李         | 李貴           | 3 | [No.41]と同族。   |
| 126 | Altačín   | Mouĵei       | 6 | No. 3 の子孫。  |
| 127 | Tatar     | Bayandelger  | 6 | No. 9 の子孫。  |
| 128 | Asud      | Kesigtü      | 4 | No.10の子孫。書記の実兄、ソム「全人代」の主任をつとめて退職し、現在ソムで働いているが、戸籍が村に残っている。取材協力者の一人である。 |

表注：

- ① [No.] は本表中の番号を指し、No.は一九三九年調査当時の農家番号を指す。
- ② 農家の順番はガチャーの会計帳簿の順にもとづいた。
- ③ 本表は一九九九年の第一回調査時にとった基本データをもとに、二回目の調査（二〇〇一年）、三回目の調査（二〇〇二年）、三回目の調査（二〇〇三年）で補ったものである。
- ④ 「[No.○] と同族」という場合は、その親族関係は明記していない。